

人を借りる洋服を借りる夏の日の暮れて明るいレン
タルシヨップ 塩川郁子

所有しない。買って自分のものにならない。用が終われば返還してしまう。そんな生活の仕方をする人が増えているらしい。デートの相手もレンタル、釣に行く仲間もレンタル。そんな身軽な生き方を、肯定的に、明るさとしてとらえたところが見どころ。

ボクシングのリングのやうに華やげり山より見放く
る街の夜景は 佐世弘重

意外な比喩に注目した。言われてみればなるほどその通りという感じがする。ボクシングの会場に行ってみると分かるが、リングの上だけ強い照明があたっているの
で、少し離れて、たとえば二階席から見ると「山より見放くる街の夜景」の感じである。

弁当が美味しいというダニエルの目もと口もと真剣
である 田中徹尾

今月の八首は、正社員になろうと勉強中の青年・ウガンダから来たエンジニアのダニエルをうたった連作である。この一首だけでは、ダニエルの年齢も、なぜ真剣なのかも分からないが、連作のなかにおけば分かる。弁当のときも彼は真剣なのである。

引越の荷物に入れむレインブーツ見せる十階
の窓 倉石理恵

気に入っている景色を見せる窓を、引越荷物にしようというのである。窓を荷物に入れる、という思い切った省略が表現上のポイント。

短歌の現在

No.464 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

改訂版が出れば辞書にも載るだろうあおりうんでん
【煽り連転】 鈴木陽美

時事的な話題をうまく詠み込んだ一首。さらに、辞書の見出しを再現した下句の記号の使い方にも作者の工夫を読む。時事ものだから、三年後にはリアリティがなくなってしまうが、「今」に発信するこういう作もあつていいだろう。

誤嚥という字の中つばめ苦しくて母の喉にて細き
息する 児島直美

誤嚥とは食物や異物を気管内に飲み込んでしまうことである。この作、母上にかかわる現実をそのままうたうのではなしに、「嚥」という字をクローズアップすることで、特色のある一首にしあげている。漢字をうたう短歌は平安朝時代からある。有名な例では、「百人一首」の「吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ」という「嵐」をうたった一首がある。

白桃の匂いは満ちて青空に赤き蜻蛉のあまた飛び交
う 和田敏典

白・青・赤の色を配し、「青空……」以下「あ」音を四つ連ねている。かなり趣向の目だつ歌だが、明るく楽しそうなその場の空気が読者にも伝わって、たのしい気分させてくれる。

カラマツの薪に耐久力なくてめらんと一気に燃えて
それきり 鈴木香代子

薪にも火もちのいい薪と火もちの悪い薪がある。それだけのことをうたった一首だが、「耐久力」という語を